

児童の学習意欲の喚起と授業実践

橋本 健夫* 川越明日香** 谷山 麻香***

(平成23年10月31日受理)

What is important for the physical education practice to motivate student to learn

Tateo HASHIMOTO* Asuka KAWAGOE** Asaka TANIYAMA***

(Received October 31, 2011)

Summary

Japanese society became affluent as the nation's economy grows. It brings diversification of values among the people and the diversification of value brings individuality. It affects school education in Japan since teachers are forced to respond the individuality in education practice. Especially, it is very important issue for teachers to increase the student's desire to learn because student's motivation for learning is qualitatively and quantitatively different.

This research focused on physical education class, and investigated student's attitudes toward the class to find out factors to affect their desire to learn. Physical education class usually divided student's attitude into two extreme of likes and dislikes. The result showed that student who exhibit positive attitude had sense of asset in exercise.

要 約

経済の発展とともに社会は裕福になり、様々な価値観が存在するようになった。この価値観の多様化は学校教育に大きな影響を与えている。それは、個の多様化を意味し、彼ら一人一人に対応する教育の実践は、教員にとって多大な努力を要求する結果となっている。特に、多様なニーズを持つ児童の学習意欲の喚起は重要な課題の一つである。

本研究では、得意な児童と苦手な児童の二極化が進んでいるとされる小学校の体育の授業を取り上げ、彼らの学習意欲に影響を及ぼす要因を明らかにするために、児童の体育の授業に対する意識を調査し、分析した。その結果、彼ら自身の運動有能感が体育の授業への積極性に大きな影響を与えていることが明らかになった。

はじめに

年々、個人差が大きくなっていく児童たちを前にして、学習指導をする教員の悩みは大きい。それは、彼らのニーズが多様化するだけでなく、理解力や学習意欲についての個人差も大きくなっているからである。その彼らをまとめ、学級の雰囲気を高めて、彼ら自身が積極的に参加する授業を実践していくためには、まず、彼らの学習意欲を喚起することが求められる。この課題を追究するためには、様々な方法が存在する。本研究においては、積極的に取り組む児童と消極的な児童とに二極化しつつあると言われる体育の授業を取り上げ、その二極化の原因を探るとともに、消極的な児童に対する学習意欲の喚起の方策を追究することとした⁽¹⁾。これによって、他教科の授業に対しても学習意欲の喚起に関するヒントが得られるのではないかと考えた。

平成20年8月に改訂された学習指導要領では、「生涯にわたって運動に親しむ資質や運動能力の基礎を育てること」が求められている。この目標を達成するためには、児童が運動への関心や意欲を高めるとともに、運動することの楽しみによって運動に主体的に参加するというような内発的に動機付けられることが重要となる。岡澤(2010)は、運動に対して内発的に動機付けられるためには、運動有能感が重要であるとしている⁽²⁾。それは、「自分は出来るという自信」、「努力して、練習すれば出来るようになるという自信」、「教師や仲間から受け入れられているという自信」という3要素から成り立っている。

現在の小学校の児童は、運動に対してどのような印象を持っているのであろうか。また、その自信によって、体育授業への取り組みや普段の生活との関わりはどのように変化していくのだろうか。著者らは、様々な機会を捉えて、子どもたちが体育の授業に取り組む様子を見てきた。その中では、運動が得意で、笑顔で積極的に挑戦する子どもの姿だけでなく、運動に対する苦手意識から、体を動かすことに対して消極的で、仲間の動きばかりを見ている子どもの姿もあった。その様子は、体育以外の授業でも見られることが多く、運動に対する自信は、体育の授業態度だけでなく様々な場面においても影響しているのではないかと考えた。これまで「運動嫌い」などの原因や運動に積極的に参加できない児童に視点をあてた授業研究は多く行われてきている⁽³⁾⁽⁴⁾。さらに運動への印象との関係を調査したものも少なくない。

本研究では、児童への運動に対する印象に関する実態調査を行い、体育の授業と日常生活との関連についても調べることにした。

近年の子どもの体力低下と体育

近年、子どもの体力の低下は、かなり深刻な問題とされている。特に小学校高学年は、人間の運動機能の発達の中でも顕著な運動適齢期であり、子どもの発達段階にとって大切な時期である⁽⁵⁾。そのため、子ども自身への影響はもちろんのこと、これからの日本の社会全体への影響も大きい。文部科学省が行っている「体力・運動能力調査」によると、子どもの体力・運動能力は、昭和60年頃から現在まで低下傾向が続いている。現在の子どもの結果を昭和54年と比較すると、ほとんどのテスト項目において、現在の子どもが昭和54年の結果を下回っている。反対に身長や体重などの体格は現在の子どもたちが上回っている。このように、体格が向上しているにも関わらず、体力・運動能力が低下していることは、身体能力が低下しているという深刻な状況であると言える。子どもの体力の低下は、

将来的に国民全体の体力低下につながり、生活習慣病の増加やストレスに対する抵抗力の低下などを引き起こすことも懸念され、社会全体の活力に影響する。

平成20年度改訂版の学習指導要領（体育編）の目標は以下の通りである。

心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。

ここには、過去の体育が「出来る」ことを目指した教育であり、「出来ない」子どもたちの心の中に強い劣等感を抱かせ、体育嫌いを作り出したという反省がある。そのためにも、すべての子どもたちに楽しさを味わわせる学習を目指すことを基本的な考え方としている。

近年、スポーツ心理学領域の研究者は、子どもたちの運動に対する有能感が運動や身体活動状況における技能や行動と関係があり、重要であるということを述べている⁽⁶⁾。特に運動に対する有能感の高い子どもは、低い子どもよりも、運動にかかわる状況の中でポジティブな感情を持ち、ネガティブな感情をあまり持たないとされている。同様に、有能感の高さは、自分の行動が、自分の努力などで統制出来ると感じていることや、内発的に動機付けられること、自尊感情が高いことなど、ポジティブな達成認知と関係していることも明らかにされている。

小学生の運動に対する印象

運動に対する印象によって子どもたちの体育の授業や日常生活での関わり方が変化するのではないかと考え、運動に関する質問紙調査を行った。

調査対象：長崎市内の小学校2校4年生（111名）、5年生（112名）、6年生（130名）計353名

調査時期：2010年12月

調査方法：岡澤（1996）らによって作成された「運動有能感測定尺度」（3因子各4項目）を用い、各項目について5段階の尺度を設けた。なお、各因子を20点満点とし、合計60点満点で集計し、分析する。

調査項目：

身 体 認 知 有 能	1	運動の能力がすぐれていると思いますか。
	2	たいていの運動はじょうずにできますか。
	3	運動のじょうずな手本として、よく選ばれますか。
	4	運動について自信をもっているほうですか。
統 制 感	5	努力さえすれば、たいていの運動はじょうずにできると思いますか。
	6	少しむずかしい運動でも努力すればできると思いますか。
	7	練習をすれば、かならず技術や記録は伸びると思いますか。
	8	できない運動でも、あきらめないで練習すればできるようになると思いますか。
受 容 感	9	いっしょに運動しようとしてくれる友だちがいますか。
	10	運動をしているとき、友だちがはげましたり応援したりしてくれますか。
	11	いっしょに運動する友だちがいますか。
	12	運動をしているとき、先生が励ましたり、応援してくれますか。

表1 運動有能感尺度における3因子の合計得点

点数	男子		女子		全体	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
～20点	5人	2.7%	4人	2.4%	9人	2.5%
～25点	4	2.2	6	3.6	10	2.8
～30点	5	2.7	7	4.1	12	3.4
～35点	17	9.2	14	8.3	31	8.8
～40点	17	9.2	25	14.8	42	11.9
～45点	27	14.7	30	17.8	57	16.1
～50点	32	17.4	28	16.6	60	17.0
～55点	36	19.6	26	15.4	62	17.6
～60点	41	22.3	29	17.2	70	19.8
計	184	100.0	169	100.0	353	100.0

表2 各因子の得点分布

点数	身体的有能さの認知		統制感		受容感	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
4～8点	81人	22.9%	17人	4.8%	22人	6.2%
9～12点	86	24.4	32	9.1	52	14.7
13～16点	86	24.4	88	24.9	93	26.3
17～20点	100	28.3	216	61.2	186	52.7
計	353	100.0	353	100.0	353	100.0

る児童と自信のない児童がほぼ同程度の割合で存在していることを示している。

また、「統制感」については、約8割が13点以上の高得点であることから、多くの児童が「努力すれば出来るようになる」という自信を持っていることが分かる。一方、少数ではあるが、「努力をしても出来るようになるとは思わない」と答える児童がいることも分かった。

「受容感」については、高得点の児童が約5割を占め、13～16点の児童も含めると約8割の児童が他に受け入れられていると感じていると推測できる。一方、得点の低い児童は、友人や教員から受け入れられていないと感じている可能性がある。

「統制感」や「受容感」は17～20点の割合が多く、4～8点の割合が少ない。これに対して、「身体的有能さの認知」は、いずれも平均的な分布となっている。このことから「身体的有能さの認知」に関する自信が運動に対する好感度の高低に影響を与えるのではないかと考えられる。

学校体育・運動に関する意識調査

さらに、この調査と同じ児童を対象として、学校での体育や普段の生活における運動に関する調査を行った。調査項目は以下の通りである。

1. 体育の授業が好きか
2. 体育の授業で行う好きな種目
3. 体育の授業で行う嫌いな種目
4. 体育の授業で楽しいと感じたのはどんなときか
5. 体育の授業で嫌だと感じたのはどんなときか
6. 運動が得意な方であると思うか
7. 体育の授業以外で体を動かすことは好きか
8. 運動会は好きか
9. 放課後や休日の運動への取り組み
10. 小学校入学前の運動への取り組み
11. スポーツクラブの加入状況

1. 調査結果

調査結果を示したものが表1である。

表1に示すように、5割以上の児童が50点を超えていることから、運動に対して自信を持っている児童が多いことが分かる。

2. 各因子間の比較

運動有能感尺度を構成する3つの因子の分析結果が表2である。

表2に示すように、「身体的有能さの認知」については、いずれの得点群もおおむね平均的にばらつきがあることが分かった。これは、運動に対して自信のあ

表3 体育の授業に対する好意的感情

項目	男子		女子		全体	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
とても好き	133人	72.3%	75人	44.4%	208人	58.9%
どちらかという と好き	42	22.8	57	33.7	100	28.3
どちらかという と嫌い	5	2.7	27	16.0	32	9.1
とても嫌い	4	2.2	10	5.9	13	3.7
計	184	100.0	169	100.0	353	100.0

表4 体育の授業の中で好きな種目

項目	全体	
	人数	割合
ボールゲーム	199人	56.4%
水泳	64	18.1
とび箱	41	11.6
鉄棒	15	4.2
陸上	11	3.1
ダンス	11	3.1
マット運動	6	1.7
その他	6	1.7
計	353	100.0

表5 体育の授業の中で嫌いな種目

項目	全体	
	人数	割合
ダンス	84人	23.8%
鉄棒	63	17.8
マット運動	52	14.7
陸上	49	13.9
とび箱	40	11.3
水泳	32	9.1
その他	23	6.5
ボールゲーム	10	2.8
計	353	100.0

表6 体育の授業が楽しいと感じるとき

項目	男子		女子		全体	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
出来なかった運動が 出来たとき	90人	48.9%	84人	49.7%	174人	49.3%
友だちと一緒に 体を動かしている とき	47	25.5	58	34.3	105	29.7
先生に褒められ たとき	6	3.3	7	4.1	13	3.7
競争に勝ったとき	20	10.9	10	5.9	30	8.5
みんなより運動 がうまく(はやく) できたとき	12	6.5	6	3.6	18	5.1
楽しいと感じた ことはない	8	4.3	4	2.4	12	3.4
その他	1	0.5	0	0.0	1	0.3
計	184	100.0	169	100.0	353	100.0

体育の授業に対する好意的感情

「体育の授業は好きですか」という問いに対する結果を表3に示す。

表3に示すように、8割強の児童が、学校の体育の授業に対して好意的な感情を抱いていることが分かった。しかし、男女間で見ると、男子は9割以上の児童が体育の授業が好きなのに対し、女子は8割に満たない。このことは、男女間で検定を行った結果、1%水準で統計的に有意な差が見られた。

体育の授業の中で好きな種目、嫌いな種目

「体育の授業の中で好きな種目、嫌いな種目は何か」という問いに対する結果を示す。好きな種目については表4、嫌いな種目については表5である。

体育の授業が楽しいと感じるとき

「体育の授業が楽しいと感じたときはいつですか」という問いに対する結果を表6に示す。

表6に示すように、

男女間で大きな差は見られなかった。男女共に約5割の児童が、達成感を得られたときに、体育の授業が楽しいと感じていることが分かる。

表7 体育の授業が嫌だと感じるとき

項目	男子		女子		全体	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
危険な目に遭ったとき	45人	24.5%	28人	16.6%	73人	20.7%
みんなより運動が苦手だと感じたとき	20	10.9	49	29.0	69	19.5
練習しても上達しなかったとき	20	10.9	38	22.5	58	16.4
勝負に負けて悔しい思いをしたとき	12	6.5	4	2.4	16	4.5
運動することがきつかったとき	10	5.4	11	6.5	21	5.9
いやだなと感じたことはない	73	39.7	37	21.9	110	31.2
その他	4	2.2	2	1.2	6	1.7
計	184	100.0	169	100.0	353	100.0

体育の授業が嫌だと感じるとき

「体育の授業が嫌だと感じたときはいつですか」という問いに対する結果を表7に示す。

表7に示すように、男女間で差が見られた。男子の中で割合が高かったのは「危険な目に遭ったとき」であるのに対し、女子は「みんなより運動が苦手だと感じたとき」であることが分かった。男女間で検定を行った結果、1%水準で統計的に有意な差が見られた。

表8 運動に対する自信

項目	男子		女子		全体	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
得意だと思う	67人	36.4%	34人	20.1%	101人	28.6%
どちらかといえば得意だと思う	68	37.0	50	29.6	118	33.4
どちらかといえば得意ではないと思う	26	14.1	54	32.0	80	22.7
得意ではないと思う	23	12.5	31	18.3	54	15.3
計	184	100.0	169	100.0	353	100.0

運動に対する自信

「運動が得意な方であると思いますか」という問いに対する結果を表8に示す。

表8に示すように、「得意だと思う」と「どちらかといえば得意だ

と思う」の割合が男子は約7割であるのに対し、女子は約5割である。これは、男子の方が、運動が得意であると感じていることを示している。男女間で検定を行った結果、1%水準で統計的に有意な差が見られた。

考察

これまでの結果を分析することによって、小学校体育における児童の学習意欲を高める指導の在り方について考えてみたい。上述した運動有能感の高低と体育の好き嫌いに関する2つの調査から、身体的有能さの認知が高く(17点以上)、体育がとても好きだと答えた児童(運動有能感が高い児童とする)と、身体的有能さの認知が低く(12点以下)、運

動が嫌いと答えた児童（運動有能感が低い児童とする）をそれぞれ17名ずつ抽出し、両者における体育の授業等に対する意識の差を分析した。

表9 体育への好感度

項目	運動有能感の高い児童		運動有能感の低い児童	
	人数	割合	人数	割合
とても好き	17人	100.0%	0人	0.0%
どちらかという好き	0	0.0	7	41.2
どちらかという嫌い	0	0.0	4	23.5
嫌い	0	0.0	6	35.3
計	17	100.0	17	100.0

表10 日常生活における運動の相手

項目	運動有能感の高い児童		運動有能感の低い児童	
	人数	割合	人数	割合
兄弟	2人	11.8%	0人	0.0%
学校や塾の友だち	3	17.6	8	47.1
自分一人	0	0.0	1	5.9
近所の友だち	2	11.8	1	5.9
スポーツクラブの仲間	3	17.6	7	41.2
運動はしない	7	41.2	0	0.0
計	17	100.0	17	100.0

2. 日常生活における運動の相手

「学校から帰った後や休みの日に、だれと運動しているか」という問いに対する結果を表10に示す。

表10に示すように運動有能感が高い児童は、スポーツクラブの仲間と運動する割合が高く、スポーツクラブに所属していなくても、体育の授業以外でだれかと運動している。一方、運動有能感が低い児童は、「運動はしない」と回答する割合が最も高く、スポーツクラブに所属している児童や学校の友だちと一緒に運動する児童の割合はとても低い。

3. 体育の授業における子どもの意識

(1) 「体育の授業の中で、嫌いな種目は何か」という問いに対する結果を表11に示す。

表11に示すように、運動有能感が高い児童は、嫌いな種目として「ダンス」を回答している割合が高く、「嫌いな種目はない」と回答している児童も2割以上いた。また、運動有能感の高い児童と低い児童との間で検定を行った結果、1%水準で統計的に有意な差が見られた。

また、運動有能感の高い児童は、好きな種目としてボールゲームと回答している割合が高く、勝敗が分かれる種目を楽しんで行っていることが分かる。一方、運動有能感の低い児童は、陸上・とび箱・鉄棒を嫌いな種目として挙げる割合が高い。彼らが

1. 体育への好感度

「体育の授業は好きですか」という問いに対する結果は表9に示す。

表9に示すように、運動有能感の高い児童と低い児童では、大きな差がみられた。運動有能感が高い児童は全員、体育の授業がとても好きであることが分かる。それに対して運動有能感が低い児童は、「とても好き」と回答した児童は1人もいなかった。「どちらかという嫌い」「嫌い」のいずれかに回答した割合は約6割を占めた。このことから、運動に対する自信は、体育の授業に対する好意的感情となって表れている。

表11 体育の授業における嫌いな種目

項目	運動有能感の高い児童		運動有能感の低い児童	
	人数	割合	人数	割合
マット運動	1人	5.9%	2人	11.8%
鉄棒	1	5.9	3	17.6
とび箱	0	0.0	4	23.5
陸上	0	0.0	6	35.3
ダンス	11	64.7	2	11.8
嫌いな種目はない	4	23.5	0	0
計	17	100.0	17	100.0

嫌いな種目に共通して言えることは、「出来る」、「出来ない」が明瞭であり、それが誰の目にも明確になることである。それだけに、他の人の目を意識することが強く、劣等感や恐怖感、屈辱感に苦しむ場合が多いと考えられる。

(2)「体育の授業が嫌だと感じたのはどんなときですか」という問いに対する回答結果を表12に示す。

表12 体育の授業が嫌だと感じたとき

項目	運動有能感の高い児童		運動有能感の低い児童	
	人数	割合	人数	割合
危険な目に遭ったとき	4人	23.5%	3人	17.6%
みんなより運動が苦手だと感じたとき	0	0.0	6	35.3
練習しても上達しなかったとき	0	0.0	6	35.3
嫌だと感じたことはない	13	76.5	2	11.8
計	17	100.0	17	100.0

表12に示すように運動有能感の高い児童は、約7割の児童が「嫌だと感じたことはない」と回答している。それに対して運動有能感の低い児童は「みんなより運動が苦手だと感じたとき」、「練習しても上達しなかったとき」の回答が最も多く、「嫌だと感じたことがない」の割合が極めて低かった。また、運動有能感

の高い児童と低い児童の間で検定を行った結果、1%水準で統計的に有意な差が見られた。

以上のように、運動有能感の高い児童は体育の授業だけでなく、普段から授業以外においても積極的に運動に取り組んでいることが分かった。一方、運動有能感の低い児童は、陸上やとび箱など「出来る」、「出来ない」が明瞭である種目に苦手意識を持ち、劣等感や屈辱感を感じる傾向が見られた。運動に対する自信が、体育の授業だけでなく、運動会や日頃の運動との関わりに大きく関わっていることも分かった。従って、体育の授業を通して、運動に対し、自信を持たせるような授業の在り方や、教員としての適切な手立てが必要である。

また、体育の授業に関しては児童一人一人が持つそれぞれの身体的有能さの認識が積極的あるいは消極的な態度となって表れていると考えられる。つまり、児童は成長するいずれかの時点で自らの身体についての認識を持ち、それを継続的に自らの意識の中にすり込んでいくのである。その認識は一度の体験ではなく、数多くの体験の中から生まれてきたものと考えられる。そうなれば、それを変化させることが不可能になる。一方で、多くの児童は努力すれば上達するとの意識も持ち続けている。これを生かすのが教員の役割である。授業の中でこの意識を活用し、彼らの認識を変える工夫を盛り込まなければならない

い。とはいえ、有能さの意識を一度で引き出すことは無理である。まずは少しずつうまくなったことを「褒める」ことが一歩だと思う。教員に努力が認められ、褒められることによって、彼らはさらに努力を行うことであろう。その結果は、きっとプラスとなって表れる。それをまた褒めるという賞賛のサイクルを形成することである。加えて、友達の賞賛が受けられるようにすべきである。友人の良さや進歩を常に褒め合うことによって共に進歩する学級作りが必要となる。そして、いくつかのチャレンジの末に目標が達成されるならば、児童一人一人にとって大きな心と身体への財産となる。

このことは、他の教科にも通じると考えている。小学校の教科が学習初期から不得手である児童はいない。いつかの時点で達成感を味わうことが出来なくなっただけである。そのときに自己への納得感も失ったことになる。これを回復させるには、出来るだけ早い時期に上述のような学級作りを行い、教員と友人の支援が常に得られ、少しずつ良き点を伸ばせるようにする必要がある。この積み重ねが達成感や納得感につながっていく。

社会は国際化に向けて進展している。児童たちは将来、世界に向けてチャレンジをしなくてはならない。そのときに必要なのは自己への自信であり、納得感である。これらは過剰になると各自の成長を奪うものになるが、謙虚さと共にこれらを持つことは自己への誇りにも通じる。

おわりに

多様な児童が積極的に学習に取り組むためには、まず彼らの意欲の喚起が必要であると考える。その方策を考えるためには、体育に対する児童の意識を調査した。これは、まず学習者の意識を優先すべきとの考えによるが、授業を組み立てる教員側からの方策も検討する必要がある。次の段階では、今回の児童の調査結果をもとに、教員がどれをどのように生かしていくかについて追究を行いたい。

参考文献

- (1) 阪田尚彦・高橋健夫・細江文利、「学校体育授業事典」, pp.76-77, 大修館出版, 1995年
- (2) 高橋健夫・岡出美則・友添秀則・岩田靖,「新版 体育科教育学入門」, p.11, 大修館出版, 2010年
- (3) 中森孜郎,「体育ぎらいの子」, pp.14-17, 岩波書店, 1983年
- (4) 運動遅滞研究会編,「小学生の運動指導」, pp.11-13, 同文書院1984年
- (5) 三木四郎,「新しい体育授業の運動学」, pp.16-20, 明和出版, 2005年
- (6) 杉原隆,「新版 運動指導の心理学」, p.153, 大修館出版, 2003年